

一般選抜 前期 A

試験問題

国語

【注意事項】

- 一、試験開始の合図があるまで、この表紙を表にして、この試験問題冊子を開かないでください。
- 二、試験問題冊子は、八ページ（この表紙は含めません）あります。
- 三、試験終了後、解答用紙は、すべて回収しますので持ち帰らないでください。
- 四、試験終了後、この試験問題冊子は、持ち帰ることができます。
- 五、問題の内容に関する質問にはお答えできません。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「社会として子どもを産まない」という選択肢はないが、二十一世紀になって、産みたくても産めない社会となってしまうようだ。私たち **a** 団塊世代の人生を振り返ると、自分たちの世代はどうか結婚して家族をもち、子どもを産み育てるという選択肢を多くの人たちがたどることができた。結果として、日本社会全体としてどうか人口規模を保つことができた。しかし、私たちの世代の男女がそれぞれかかえていた家族や人生、職業キャリア、社会とのかかわりに関する不安と不満が、次の団塊ジュニア世代では、「結婚したくない」「結婚したくてもできない」「子どもを産みたくない」「産みたくても産めない」という状況に若い男女たちを追い込んでしまったようだ。

その不安や不満とは何か。家族の問題は家族の数ほど多様だ、という生活常識からみると **b** 単純化してはいけなかもしれない。ただ、社会的 **c** 風潮という意味でマクロな分析をしてみると、「男は仕事・女は家庭」という **(1)** ステレオタイプの性別役割人生を送ることを **(2)** 余儀なくされた人たちを増やしてしまったといえるだろう。「男性は安定就職」「終身雇用」「会社人間として滅私奉公」という社会的条件の中で「働きすぎる男たち、家族に目を向けない父親たち」を生み出した。一方、「女の仕事は結婚までの腰掛け」「子どもが幼い時には母親が **d** 密着すべきという良妻賢母神話」の中で、「社会に出たくても出られない **e** 代償」として、子どもに過剰な期待をそそぐ女性を増やしてしまったのではないだろうか。核家族内部での夫と妻の行き過ぎた役割分担。そこでの不満が、家族をもつことの意味や楽しさを、成長した自分の息子や娘たちに伝達できない家族が増えてしまったのではないだろうか。

(**ア**)、社会はといえば、せっかく就職しようとする若者にも仕事の場を与えられない状況が出てきた。平成 **f** 不況の中で「就職 **g** 氷河期」に直面し、「非正規雇用」のような不安定雇用状態に若者たちをおとしめてしまい、収入不足で結婚できない若者が増やし、子どもを産み育てる社会的条件をつくれなくなっている。社会として子どもを産み育てられないことは「未来社会の破壊」でもある。これは私たち、大人世代の責任である。女性を排除した単一均質社会による日本の制度的 **h** 疲労の原因の一つではないか。

いっそう問題が根深いのは、この不安定雇用状態にあっても自分から道を切り拓こうとする子どもも親も少ないことだ。多くの親には終身雇用で安定した収入があり、たとえ退職後でも目の前に年金もあり、もちろん自宅という住居も財産もある。親としても、子どもが結婚して配偶者が加わるよりも、息子、娘との気楽な暮らしに流されがちだ。親と同居する未婚の子どもたちの間にも、安定した仕事につけないこと、結婚できないこと、子どもを産み育てるだけの収入がないことに対する危機感が薄い。滋賀県の直近の世論調査では、二十〜三十代の人たちが県に対して望む最大の政策は「介護医療の整備」であり、「子育て支援」は優先度が低い。目の前にいる親の介護に意識を向ける姿は **i** 親孝行であり **(3)** 美德だが、自分が子どもを産めない状態は社会的に深刻で、未来破壊的であるという意識までつながることは少ない。社会的に子どもが生まれないことと、自分が生むこととは別ものなのだ。

「家庭を基礎とする我が国の自助自立の精神」は理想だが、現実は違う。先に述べたように、家庭を築く社会的条件も欠いたまま、正規雇用につけず、安定した収入もなく、結婚したくてもできない若者たちが増えている。(**イ**)、せっかく産まれた子どもたちが、健やかに育つ条件を欠いているのだ。虐待・ネグレクトの報道も年々増え続けている。滋賀県の調査によれば、虐待加害者の七割以上は実母であり、実父も二割以上あるという。何と悲しい現実なのか。高齢の親は、いつまでたっても独立できない子どもをかかえ、「孫を抱きたい」という思いも満たされず、老後を迎えざるをえない。(**ウ**)、「婚活」などが社会的に求められる時代になっている。「子どもは社会で育てるのか、家族が育てるのか？」という問い自身が、今の少子化の原因を **j** 反映していない。希望したら誰でも子どもを産めるような条件をつくりだす責務は、社会の側にある。

(嘉田由紀子『知事は何ができるのか——「日本病」の治療は地域から』による)

問1 傍線部 **a**、**j** の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問2

傍線部(1)「ステレオタイプ」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 人々に根づいている考え方のこと
- 2 事柄に対して一意に定まる答えのこと
- 3 特定のテーマにみられる類型のこと
- 4 ある集団で流行している概念のこと

問3

傍線部(2)「余儀」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 特別で珍しいできごとのこと
- 2 ありふれて取るに足らない事柄
- 3 他の異なる方法や手段のこと
- 4 自分勝手に振る舞う心のあり方

問4

傍線部(3)「美德」のここでの意味の説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 人に喧伝^{けんでん}できる長所
- 2 介護以外でも活かせる利点
- 3 尊敬の念を集めること
- 4 世間から見ても立派な行い

問5

空欄(ア) (イ) (ウ) を補う言葉の組み合わせとしてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|------|---|------|
| 1 | ア | 加えて | イ | つまり | ウ | なぜなら |
| 2 | ア | 加えて | イ | ところで | ウ | そのうえ |
| 3 | ア | 一方 | イ | そして | ウ | それゆえ |
| 4 | ア | 一方 | イ | ところが | ウ | また |

問6

本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 性別役割は団塊世代に好意的に受容された生き方であったが、団塊ジュニアが固定的な役割分担に縛られずに社会生活を送るといふ点では機能しなかった。
- 2 二十〜三十代の若者が子どもを産み育てることは困難であり、彼らはそれを自らの世代や日本社会が直面する深刻な課題であると考えている。
- 3 日本における自助自立の精神は家庭をその単位としており、自助自立の精神を社会に浸透させるためにも少子化への対策が必要である。
- 4 少子化による「産みたくても産めない社会」を打開するには、結婚や子育てを実現するための条件を社会が作り出すことが求められる。

【二】 次の(1)～(5)の各問いに答えなさい。

(1) 次の四字熟語の空欄 に入る漢字二字を書きなさい。

篤実 (優しく穏やかで思いやりもある人柄)

(2) 熟語の構成が他と異なるものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 波浪
- 2 危機
- 3 動揺
- 4 道路

(3) 次の表現の傍線部は誤っている。正しい漢字二字を書きなさい。

彼は短刀直入に質問をした。

(4) 「針小棒大」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 同じような物でも役割や性質が異なること
- 2 一見無用なものであっても意味をもつこと
- 3 わずかな努力も続ければ成果になること
- 4 小さな物ごとを大げさに表現すること

(5) 志賀直哉の作品を、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 友情
- 2 鼻
- 3 城の崎にて
- 4 生れ出づる悩み

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現代科学の直接の出発点は近代西欧にある。しかし、実際に「科学者」と呼ばれる社会的存在、あるいは **A** が西欧に誕生するのは一九世紀も半ばごろと言ってよい。科学者を表す英語“scientist”が造語されて、使用されはじめるのは一八四〇年代以降、専門的な科学者の養成機関が高等教育の制度に組み込まれはじめるのは一八七〇年代、有機化学を唯一の例外として、科学者が一般社会における職業機会を得るのは、二〇世紀に入って、かなり経ってからのことであった。一例をあげよう。物理学者アインシュタイン（一八七九～一九五五）は二〇世紀初頭、必死になって職探しをした。彼に言わせると、友人の友情と俠気のお蔭で、ベルン特許局の三級技師にやっとなりつくまで、シチリアの南端から北海にいたるあらゆる可能性を探して、**a** リレキ書を送ったが、**(1)** **すべては無駄だった、とのこと。**

科学者以前の自然探究者、たとえばニュートンはなぜ自然現象の探究に向かったか、たとえば、基本は、神の被造世界に存在する神の力の顕現を追い求めるところにあった。しかし、一八世紀世俗化の革命を経た後のヨーロッパ世界に、個人的にはいざしらず、基本的な場面では、もはやそうした宗教的動機は存在しなかった。そこにあるのは、自然の中にどうしても解きたいと思われる謎を見つけ、その解明に自分を賭ける、それ以上でもそれ以下でもない、個人的な動機であった。この時期の科学がしばしば「**(2)** 好奇心駆動型」“curiosity-driven,”と言われる所以である。この平たく言えば「知りたい」という動機に裏打ちされた科学研究という行為は、アリストテレス（三八四～三二二BC）が『**形而上学**』の冒頭で **B** したように、人間の本性に由来するものであり、それ自体は倫理的な判断の外にある。言い換えれば、良心の断ずる以前の、あるいはそれと並行した行為として、認められると言ってよからう。

ほとんど同じころのヨーロッパに出現した「技術者」(engineer=英ingenieur=仏)が、同業者組合を造って、ただちに倫理綱領あるいは行動規範を発表したのは、彼らの技術を買ってくれるクライアントが社会のなかに存在し、彼らの要求に誠実に応える倫理的義務と責任があるうえに、それを実行することが一般社会の福利に反しないよう努めることにも、同じように義務と責任が生じるからであった。

初期の科学者も、同業者組合に相当する団体（「科学者共同体」と呼ばれ、具体的には「学会」である）を組織するが、倫理綱領や行動規範への関心はきわめて希薄であった。日本最大の学会と言ってよい日本化学会や日本物理学会が行動規範を公表するのは、実に二一世紀に入ってからのことである。

科学研究は、個人的動機に基づくものであり、しかもその動機自体は人間の本性に基づく行為である以上、そこに倫理上の問題が生じるとすれば、研究において良心的であるか否か、という側面しか浮上しないのは、ある意味で当然である。

科学者のもう一つの特性は、高度な専門性にある。一九世紀末以降、科学は極度に専門化していく。彼らの研究内容は、共同体の同僚しか理解できない。したがって、彼らは、外部からの介入をそもそも不可能と見做し、また宗教が科学的真理に介入したとされる「ガリレオ事件」を象徴として、外部からの介入を極端に嫌う。

一九八五年全米科学アカデミーは“On Being a Scientist,”というパンフレットを発行した（現在は第三版、その池内了訳を参考文献にあげる）。科学者共同体のなかで、近年研究倫理にもとる事例が多発するのに **b** **カンガミ**、ポスドクなどこれから科学者になろうと志す人々に、守って欲しいルールを改めて書き上げた、という趣旨の序文を持つこのパンフレットは、全二〇ページほど、その一九ページまでが、研究現場でのジュン **c** **シュ事項** になっている。データを **C** したい誘惑に駆られたときは、複数著者の論文の責任の行方は、といった項目が並んでいる。最後のページが「社会における科学」となっており、原子力やDNA研究のように、時に研究の結果が社会に大きな影響をおよぼす可能性があることに **d** **リュウイ** すべき（原文で“should be aware,”）であると書かれている。しかし、「**(3)**」ここでは、これ以上論じない」が、しかしかの文献を参照してほしい、でこの項は終わっている。

二〇世紀も終わり近くにおいて、科学者の行動規範として「画期的」と評価されたこの **D** 活動でも、社会的な責任論の扱いはこの程度であった。科学者の良心は、専門同僚（研究仲間）にのみ発動されることを示す典型例であろう。

しかし、**(3)** **科学研究をめぐる歴史的状況は、第二次世界大戦を契機に大きな変化を遂げた。** その最大の問題は核兵器の開発であった。周知のように、アメリカのマンハッタン計画は、物理学者シラード（一八九八～一九六四）が、ナチス政権下のドイツが必ずや核分裂時の巨大なエネルギーを、兵器として利用するであろう、という見込みの下で、アインシュタインを語らって、時の大統領ローズヴェルト（一八八二～一九四五）を説得したときにはじまる。実は（**注**）ドイツのウラン計画は、あるにはあったが、資金面でも、研究体制の面でもきわめて脆弱であり、到底成功のおぼつかない性格のものであったし、そのことは、「グリフィン」という特殊スパイの報告で、連合国側の、少なくとも限られた数のトップは、早くから熟知していたことが明らかになっている。しかし、開発の現場は、ドイツの脅威から守れ、というスローガンを強力な説得力として、科学者、技術者、軍人の総動員体制と、膨大な国家予算の下で、着々と進められ、広島・長崎へとつながったので

あった。

いずれにしても、好奇心ではじまった原子核の構造解析という研究が、一国どころか地球全体の運命をも支配する可能性のある、社会的な開発へとつながった、最初で、最大の局面が、マンハッタン計画であった。

科学者は、いわば史上はじめて、自分たちの携わっている研究が、大量の人命を奪い、都市を破壊することになった、という局面に立たされることになったのである。その際の身の処し方には幾通りかのパターンが見られる。

その第一は、研究・開発において指導的立場にいた物理学者たち、オッペンハイマー（一九〇四〜六七）、フェルミ（一九〇一〜五四）、テラー（一九〇八〜二〇〇三）、ローレンス（一九〇一〜五八）らのそれで、少なくとも表面的には、彼らは、自分たちが手掛けた計画の実験となる日本攻撃への利用に、最終的承諾を与えたばかりか、予想以上の成果を収めたことを喜び、多くはその後のさらなる開発への協力も、ジさなかつた。もちろん彼らの「内心」がどうであったか、窺い知ることとはできない。とくにオッペンハイマーに関して、プリンストンで親しかった人は、晩年の彼は深い「憂愁の人」であった、と述べている。

もう一方の極端は、イギリスから短期的にマンハッタン計画の現場に参加したロートブラット（一九〇八〜二〇〇五）。ドイツ計画の無力さを察知したうえで、それ以上大量殺戮兵器の開発に関わりたくない、として、計画に参加することを止めている。その後、共産党との関係を取り沙汰されたり、色々苦難が襲ったが、一九九五年、パグウォッシュ会議との関連で、ノーベル平和賞を受賞している。物理学者ではないが、生化学者シャルガフ（一九〇五〜二〇〇二）は、広島の記事に接した際、同じ科学に携わる自分も「共犯」であるという激しい **E** 感に襲われた、と述べている。これらは科学者である前に、人間としての良心の発露が示された例であろう。なおアインシュタインは、常々平和主義を唱え、ナチス政権前のプロイセン型のドイツの雰囲気嫌って、スイスに移住してもいるし、マンハッタン計画にも参加していない。

もう一つのパターンとして、例のシラードや、シカゴ大学の金属研究所の現場で、J・フランク（一八八二〜一九六四）を中心に、原子爆弾の（日本への）使用を止めるように、署名活動を行っている事例をあげよう。フランクはもともとドイツ生まれのユダヤ系で、七〇名の署名を集めることに成功したが、結局この署名録は握りつぶされた。この活動の主体は、倫理的配慮も背景にはあったにせよ、アメリカが最初にそのような兵器を使うことは、世界の評判を落とし、また、以降ソ連との核兵器開発競争を誘発する、こうした理由から、日本への使用に反対し、無人の環境に国連加盟国の代表を集めて、新兵器の威力を知らしめるデモンストレーションに止めるべき、という主張へつながっている。 **X** 的な反対論とでも位置づけられようか。

（村上陽一郎「歴史にみる科学者の良心」（『良心から科学を考える―パンデミック時代への視座』所収）による）

（注） ドイツのウラン計画Ⅱ第二次世界大戦中のドイツにおける、原子爆弾開発に関する研究。

問1 傍線部 a s e のカタカナにあたる漢字を含むものを、各群のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記しなさい。

- a
- | | | | | | | | | | | | | |
|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|
| 1 | カン | リ | の | 登 | 用 | 試 | 験 | を | 受 | け | る。 | |
| 2 | 銀 | 行 | の | 預 | 金 | リ | ッ | ツ | が | 上 | が | る。 |
| 3 | 感 | 染 | 症 | 患 | 者 | を | カ | ク | リ | す | る。 | |
| 4 | 契 | 約 | を | 期 | 限 | 内 | に | リ | コ | ウ | す | る。 |
| 5 | 不 | 要 | な | 書 | 類 | を | シ | ョ | リ | す | る。 | |

- b
- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|---|---|----|
| 1 | カ | ン | イ | な | 検 | 査 | で | 済 | ま | せ | た。 | | | | | |
| 2 | カ | ン | セ | イ | な | 街 | に | 引 | っ | 越 | し | た。 | | | | |
| 3 | 美 | 術 | 品 | の | 価 | 値 | を | カ | ン | テ | イ | す | る。 | | | |
| 4 | 下 | 級 | 生 | を | カ | ン | ト | ク | す | る。 | | | | | | |
| 5 | ジ | ャ | ッ | カ | ン | 二 | 十 | 歳 | の | 若 | さ | で | 優 | 勝 | し | た。 |

c ジュンシユ

- 1 シユミの編み物を楽しむ。
- 2 今年の予防センシユを予約する。
- 3 シユギョクの短編に出会う。
- 4 シユヨウの経過観察に通う。
- 5 刑務所のカンシユとして勤める。

d リユウイ

- 1 彼女は毎日センリユウを詠む。
- 2 彼は家業のリユウセイを願って努力している。
- 3 研究のために一年間リユウガクする。
- 4 この物質は非常に小さなリユウシからなる。
- 5 科学の実験でリユウサンを使う。

e ジさなかつた

- 1 彼は会社から正式にジレイを受けた。
- 2 祖母のジヒにすがって生きた。
- 3 小さなコジの保護に勤しむ。
- 4 天皇に仕えるジジュウの務めを学ぶ。
- 5 両者の意見はルイジしていた。

問2

空欄

A

E

を補う言葉としてふさわしいものを、次のうちから一つずつ選び、その番号を記しなさい。

- 1 啓蒙
- 2 虚飾
- 3 罪障
- 4 潤色
- 5 職能
- 6 喝破

問3

傍線部(1)「すべては無駄だった」とはどういうことか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 アインシュタインのように優れた物理学者が一般的な職に従事することに、大きな意味はないということ。
- 2 アインシュタインは必死に職探しをしたが、そうした経験は物理学の研究に有用ではなかったということ。
- 3 アインシュタインは科学者としては優秀であったが、労働の上で学術的なスキルは無用だったということ。
- 4 アインシュタインは職探しに情熱を注いだが、その甲斐はなく知人に助けを求めればよかったということ。
- 5 アインシュタインのように後世に名を残すような物理学者でさえ、職業機会に恵まれなかったということ。

問4

傍線部(2)「好奇心駆動型」とあるが、これに関する筆者の説明としてふさわしくないものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 ヨーロッパ世界では自然の解明は神の被造世界の解明という問題意識のもと行われていたが、世俗化の革命を経て、そうした宗教的動機は排斥されるようになった。
- 2 「知りたい」という動機に裏打ちされた科学研究は一八世紀から盛んにおこなわれるようになり、その後のヨーロッパ世界に宗教的動機による科学研究はほぼ存在しなかった。
- 3 一八世紀以降は自然の解明において宗教的動機よりも個人的動機が優先されるようになったが、こうした動機は倫理的判断に先んじて存在するものであった。
- 4 アリストテレスによれば、「知りたい」という個人的な動機のもと行われる研究は良心による判断の外に存在しており、倫理的判断と良心は並行した行為である。
- 5 「知りたい」という動機によって行われるこの時期の科学は倫理的な判断の外に位置づけられるものであり、その動機は自然の中における謎を端緒にしていた。

問5 傍線部③「科学研究をめぐる歴史的状況は、第二次世界大戦を契機に大きな変化を遂げた」とあるが、これに関する筆者の説明としてふさわしくないものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 それまでの科学者は倫理的責任の意識が希薄であったが、戦争を通して科学がもつ影響力に向き合うことになった。
- 2 大戦を通して科学者の行動規範が糾弾されるまで、科学研究に倫理的責任や良心の概念は存在していなかった。
- 3 核兵器開発を行うなかで、それが大量の人命を奪ったことを知りながらも新たな開発に意欲的だった研究者もいた。
- 4 原子爆弾の計画や使用に関しては、倫理的判断だけではなく政治的な判断を根拠にして反対した科学者もいた。
- 5 第二次世界大戦は、個人的動機からはじまった研究が世界全体の破滅にも繋がる開発に発展した最初の例であった。

問6 空欄 X を補う言葉としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 平和主義
- 2 現実主義
- 3 写実主義
- 4 冷笑主義
- 5 軍国主義

問7 Fさんは本文を読んで、自分の考えを整理するために次のような「メモ」を作成した。これについて後の i、ii の問いに答えなさい。

〔メモ〕

① 社会的存在としての科学者

←

② 倫理・義務からみた科学者や科学研究

(第二次世界大戦以前)

甲

(第二次世界大戦以後)

← 核兵器の開発を最大の問題として、科学研究をめぐる歴史的状況が大きな変化を遂げた。

←

③ 科学者の行動規範について、筆者は、

乙

と考えている。

i 空欄 甲 を補うのにふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 世俗化の革命を経験したヨーロッパでは、「知りたい」という動機が優先されないように研究倫理が重要視された
- 2 社会的存在として認められることはなく職業機会を得る機会もほとんどなかったため、社会から疎まれていた
- 3 一八世紀以降は同業者組合などが造られるようになり、クライアントなどを通じて社会と結びつくようになった
- 4 一八世紀までのヨーロッパでは宗教的動機のもとに行われ、一八世紀以降は好奇心が科学研究の出発点となった

ii 空欄 乙 を補うのにふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号を記しなさい。

- 1 高度な専門性を有するという特徴から外部の介入を嫌う科学者が多いが、日本化学会や日本物理学会の行動規範公表を踏まえると、そうした閉鎖性を改める取り組みがなされていることは明らかである
- 2 全米科学アカデミーのパンフレットが科学の影響力や責任について詳細に論じていないのは、科学者の良心が社会全体にではなく、研究仲間のみ影響を与えればよいと考えていたことを象徴している
- 3 個人的動機によってなされることがほとんどである現代の科学研究は、人間の本性に強く影響されてしまう以上、倫理観を前提とした科学研究の発展に向けて良心の涵養に注力していくべきである
- 4 「知りたい」という個人的な動機のもと、科学者が科学研究に邁進し良心が介在しなかった結果が第二次世界大戦での核兵器の使用であるので、現代の科学者は倫理的判断を最優先するべきである

問 8

- 次は本文を読んだ五人の生徒が語り合ったものである。本文の内容と合致する意見を一つ選び、その番号を記しなさい。
- 1 Aさん——現代までの科学研究における良心や責任の扱われ方がよく分かったよ。また、現在の「科学」の興おこりが近代西欧にある一方で、「科学者」が一般社会での立ち位置を得るには二〇世紀を待つ必要があったみたいだね。
 - 2 Bさん——確かにそうだね。一八世紀までのヨーロッパでは宗教的動機が科学研究の入り口だったと言われていたから、良心や責任の概念は、むしろ世俗化の革命以前の方が浸透していたと言えるんじゃないかな。
 - 3 Cさん——それはどうだろう。筆者は「知りたい」という動機に裏打ちされた科学研究と良心の関係を論じていて、そこから一八世紀以降の科学が良心や倫理を意識しながら発展してきたということが分かるよ。
 - 4 Dさん——倫理といえ、マンハッタン計画に言及がなされていたね。核兵器開発に携わった科学者のすべてがその内容を問題視していなかったことから、筆者は科学研究における倫理の軽視を危惧しているんだね。
 - 5 Eさん——確かにその通りだね。研究者に良心や責任に対する意識が不足している一方で社会の進歩には科学研究が不可欠だから、科学研究者はより良心を身につけていかなければならないというのが結論だと思うよ。

設問は以上です。